

茨城県初の横綱

茨城県は相撲と縁が深い。稀勢の里（現荒磯親方）が第72代横綱となった平成29年（2017）から遡ること188年前の文政12年（1829）、本県初の横綱が誕生した。四股名（力士の名前）を稲妻雷五郎という。相撲に対する心構えを説いた『相撲之伝』や多くの俳句を残した異色の相撲人である。

稲妻雷五郎（以下、雷五郎）は、本名を根本才助という。江戸時代後期の享和2年（1802）、関東平野の一角、常陸国河内郡阿波崎村（現稲敷市）、根本庄右衛門の二男として生まれた。幼少の頃から地元の草相撲で負け知らずの成績だったという。

稲敷市誕生前の平成14年（2002）、東町立歴史民俗資料館（現稲敷市立歴史民俗資料館）は『稲妻雷五郎「生誕200年」展』の図録（以下、『図録』）を発行した。それによると、雷五郎の相撲人生は、文政4年（1821）に始まった。

『図録』には「興行場所浅草御蔵前大護院に於いて、佐渡ヶ獄門人（現佐渡ヶ獄部屋）『常

州巻ノ島才助』として、二段目付け出しで初土俵を踏む」とある。また、文政6年（1823）に「巻ノ島」を「槇ノ島」に改め、雲州（出雲国の別称）松江藩松平公のお抱え力士となった。

稲妻雷五郎と改名した時期はその翌年である。『図録』によると、文政7年（1824）、「稲妻咲右衛門の四股名をついで『稲妻雷五郎』と改める」とある。稲妻咲右衛門は佐渡ヶ獄門人の大関力士で、その「稲妻」を襲名した。

『図録』は続けてこう書く。「湯島天神社において西二段目筆頭で6勝1預かりの後、西前頭五枚目に昇進」と。向かうところ敵なしで、文政11年（1828）10月、大阪、京都で大関をつとめ、江戸へ一年ぶりに帰り、江戸番付で初めて西大関（現横綱）に昇進した。

文政12年（1829）には、全国相撲界を支配していた吉田司家より横綱免許を授かった。第7代の横綱誕生である。文政4年の初土俵から数えてわずか8年。雷五郎は常陸国出身力士として初めて横綱に上り詰めた。

稲妻雷五郎

Raigoro Inazuma

雷五郎の体格は身長188cm、体重145kg。「稲妻の四股名のように素早い取り口で相手を圧倒し」（『東町史』）、「『待った』を嫌い、きれいで思い切りのよい豪快な立ち合いをした」（『図録』）という。

こうした相撲に対する姿勢を表した文書が残っている。雷五郎が天保3年（1832）に書いた『相撲之伝』である。土俵の外にあってはこう戒める。「それ相撲ハ正直を宗とし智仁勇の三ツを心得色酒奕のあしき経に不遊朝夕おきふし共心にゆるミなく精神をはげまし仮にもうそいつわりのところをいましめなを」と。

土俵の中ではこういう。「勝負の懸引ニおよんでは聊も相手に用者之心なく侮どらず怖れず氣を巨然に納め少しも他の謀り事を思わず押手さす手ぬき手の早キ業を胃中に察してつく息引息ニ随ひ其きよ実をしり勝を決するものなり」

『相撲之伝』の最後は俳句で結ばれている。「青柳の風にたをれぬ ちからかな」。

雷五郎は柳が好きだったようである。こんな句も残している。「荒そわぬ 風に柳のすまひ（相撲）かな」

天保10年（1839）11月の引退までに「幕内在位25場所。幕内勝率9割9厘。優勝相当成績10回」（『図録』）。明治10年（1877）3月に詠んだ「稲妻の 去り行く空や 秋の風」が辞世の句となった。享年76歳。（文中敬称略）

主な参考文献

『稲妻雷五郎「生誕200年」展』図録（平成14年、東町立歴史民俗資料館発行）、『東町史 通史編』（平成15年、東町史編纂委員会発行）、『すもう今昔一日の本を踏みかたむるは相撲かなー』（平成19年、茨城県立歴史館発行）等。



関東平野の一角に建つ稲妻雷五郎像＝稲敷市八千石、稲敷市立歴史民俗資料館敷地内（筆者撮影）

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解くヒント―「智仁」の次に「勇」あり